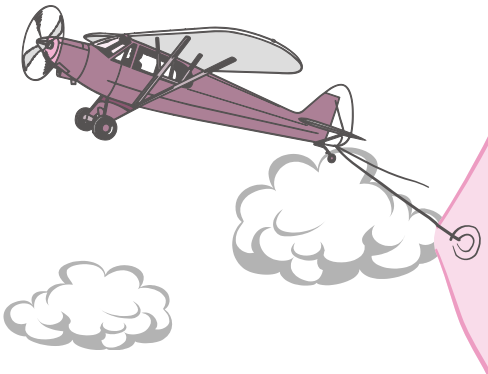
半世紀前からの贈り物

＝今、蘇る「文集」＝

蒲郡市民間大使
内田雅敏プロフィール
蒲郡町生まれ
東京弁護士会所属
著書「乗っ取り弁護士」、「これが犯罪？ビラ配りで逮捕を考える」など多数



前号までのあらすじ

思いもかけず内田氏に届いた小学2年のときの文集。

文集を開くと、同級生たちの懐かしい文章が目に飛び込んできました。クラス、男女の別なく混合でいろいろなテーマごとに書かれている文集の「馬」、「犬」と読み進むうちに…。

自分の文章を探してみる。あった。

ひこうき

きょうがっこうでりかのべんきょうをしているとひこうきがびらをまいっていって。ぼくのよこのこがはやくじぎょうがおわらんかなあといいました。びらは3ねんせいのきょうしつのやねにおちました。ひがしのうんどうばにもおちました。（M・U男児）

授業中、教師の方ではなく窓の外を見て、よそごとばかり考えている性格はすでにこのころからあったようだ。この文章については全く記憶がない。そもそもこのような文章があったことすら覚えていない。もしかすると学校からもらって帰っても父母に見せていない。

なにしろ小学校2年生のころには、学校から帰ると毎日のように自転車をこいで海に行き、ハゼ釣りをしていたからだ。

あたりがあったときの、あのぐぐっとくる感触はなんともいえないものであった。学校に行ってもエサをどうするとか釣りのことばかりで授業はうわの空だった。その結果、算数の試験など5点、10点ばかりだった。もちろん100点満点でだ。答案用紙を見つけた母は、さすがに怒った。父母から「勉強せよ」と言われたのは、あとにも先にもこの1回限りであった。

浜では岩に付いているカキを石で割って海水で洗ってそのまま食べた。イソギンチャクに指を突っ込んだりするなどのイタズラもした。小学校2年生のときから夏には貸しボート屋で働いているという早熟な同級生がにーっと意味ありげな笑い方をしたので同じように笑った。そうすることが大人びた態度のような気がしたのだ。

ひこうきに関する文章はけっこう多い。子供にとって大空を飛び回ってビラをまいてゆくひこうきには大変興味深く、ビラを拾うのも面白かったのであろう。

ひこうき

あっ！、ひこうきだ、びらをまいていった。ひろってみたら、火の用心だった。そうして、うちにかえったら、火の用心のかみが、またおちていた。そこにおとうとがかえってきて、火の用心のびらちょうだいと、いったのでいちまいあげました。（M・F女児）

ぼくはきょうしつでべんきょうをしていますとぶうんと、おとをたててひこうきがっこうをまわってびらをまいていきました。みんなはおおさわぎをしました。（A・O男児）

名古屋、豊橋、豊川など空襲あるいは艦載機による機銃掃射の恐怖などを味わったこともあったに違いない教師たちは、子供たちのこのような文章を見て、戦争が終わって平和な時代になったことをつくづくと実感したのではなかろうか。

（つづく）